

鳥餌入れとその用例について —平成 18 ～ 20 年度首里城跡出土品から—

Ceramic Bird Feeders and Their Usage

- Artifacts from the Shuri-jo Castle Site in 2006-2008 Fiscal Year -

仲座 久宜
NAKAZA, Hisayoshi

ABSTRACT : Two ceramic bird feeders introduced from china were recovered from the Shuri-jo Castle site. In this paper I focus on these materials, and also study Okinawan earthenware bird feeders recovered from other sites in Naha city as a comparison. In addition, I also refer to some records of pet rearing in Okinawa. Finally, I explore the usage of these artifacts, referring to modern examples of Chinese bird feeders and a case of the usage observed in Vietnam.

1. はじめに

平成 18 年度から 20 年度にかけて実施した首里城跡発掘調査において、愛玩鳥の飼育に用いる餌入れ、あるいは水入れと思われる中国産磁器が 2 例出土している（本稿では餌入れと称する）。沖縄県内におけるこの種の遺物は、沖縄産及び関西系陶器の例は散見できるものの、輸入陶磁としては、管見では現段階において類例がないものと思われる。本稿ではこの首里城跡出土資料とともに、近世以降に製作された陶器製餌入れの出土事例も紹介し、さらに参考資料を用いてその使用法を推測してみたい。なお、出土磁器製餌入れの所見は大橋康二氏、森達也氏に賜り、出土動物骨に関する助言を上原静氏にいただいた。記して感謝申し上げたい。

2. 出土資料紹介

首里城跡から出土した資料は、1 点目が平成 18 年度及び 20 年度の銭蔵地区発掘調査で得られたもので、のちに両者が接合できた色絵磁器である。もう 1 点は、平成 19 年度の御内原北地区発掘調査で得られた青磁製の餌入れである。なお、これらをトリの餌入れとしたのは、その小振りなサイズと、鳥籠内部に固定する目的で胴部に付けられた環耳の存在による。ここでは比較資料として、沖縄県内外の遺跡において出土した餌入れも紹介する。

①色絵磁器製餌入れ

図版 1 左手の資料は、平成 18 年度及び 20 年度にまたがって出土した色絵磁器である（仲座 2010）。いずれも首里城北側外郭に位置する銭蔵地区の方形石組遺構床面からの出土で、遺構の年代は、外郭拡張後である 15 世紀末以降を想定している。平成 18 年度に出土したのは、接合資料の左手にあたる部分で、部位的に環耳がみられないことから、当初は型造りの小鉢を想定していた。しかし、平成 20 年度に環耳が付く図の右手破片が出土し、前出資料と接合されたため、2 点は同一個体の餌入れであることが判明した。

資料は景德鎮産の色絵磁器で、その上面観はモモの実を縦割りにしたハート形を呈する。この胴部側面には、果梗（へた）と思われる突起がコブ状に貼付され、その対極には、実の先端にあたる部分が尖らせて表現される。側面観は内湾する浅鉢形を呈し、口径は 5 ～ 6 cm、底径 2.8 ～ 3.5 cm、器高 3.3 cm を測る。底部は施釉後に接地面のみへうで削り、不定型なベタ底を成す。本体の成形は、型により左右を個別につくり貼

り合わせている。この接合部の境界はナデ消されるが、実の先端脇から果梗の脇にかけ、内面の一部で釉下に浅く凹み、また無釉の底面でわずかに隆起する。

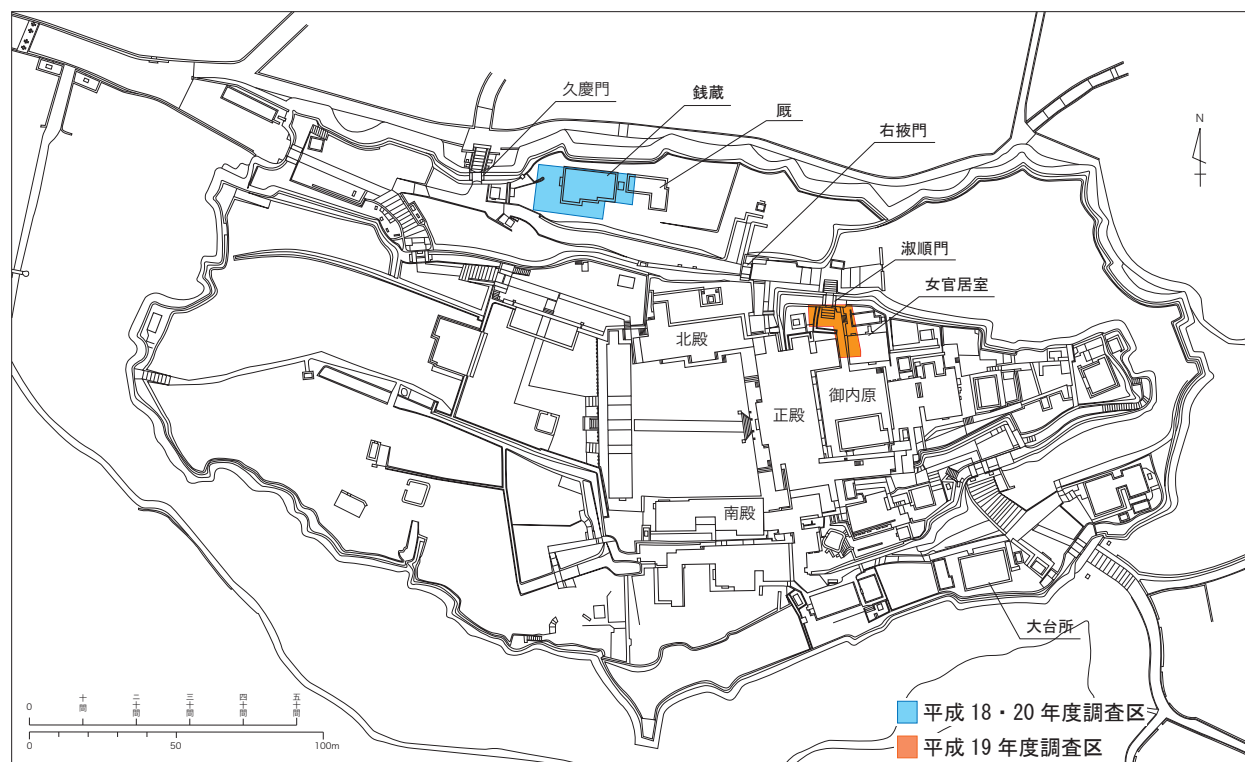
環耳は1点が胴の中央部で縦位に貼付されており、紐状の外側部分が破損している。この環耳の孔は粘土を縦位に貼付後、左側からあけたとみられ、孔の右内側には、穿孔の際に生じたバリが釉を透過して確認できる。なお、この環耳の点数については、第2図11・12に示した群馬県五日牛南組遺跡出土の青花太鼓型餌入れの例で、2点が近接して貼付されるのが確認できる（大橋 1992）。本資料に残る環耳の痕跡は1点であるが、本体部がその右脇から破損しているため、2点目となる環耳が存在したかの判読はできない。

釉は澄んだ青白色で厚く、貫入はみられない。かなり剥落・退色しているが、部分的に上絵付けによる朱色の顔料が斑状に残る。これは本資料の形状がモモであるだけに、当初は器面に広く塗られていた可能性がある。さらにこの顔料は、破片の口縁部に残る焼成時の窯傷らしき亀裂中にもみられ、この亀裂を埋めて接着する機能も兼ねていたことが想定できる。また器面の一部には、微小な呉須の飛斑が複数確認でき、本資料を焼成した窯では、青花も同時に焼いていた可能性がある。なお、モモの実は不老不死・長寿・破邪を象徴する吉祥図案とされ、古くから様々なモチーフに用いられている。

②青磁製餌入れ

図版1 右手及び第2図1の資料は、平成19年度の御内原北地区において、15世紀中葉に位置付けている基壇状遺構内の側溝中から出土したものである（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）。

本資料は破片がまとまって出土したため、完全に近いレベルまで接合ができた。中国龍泉窯産の青磁で、年代は14世紀後半～15世紀前半である。器形は口縁が内湾する平底の鉢形で、成型は轆轤によるものと思われる。口径はやや楕円で4～4.3 cm、底径2.9 cm、胴の最大径6.2 cm、器高3.6 cmを測る。口唇断面は丸く内湾し、器厚は最大6 mmを測るが、胴の最大径付近の器厚は1.5 mmで、釉を除いた生地のみ厚さだと、1 mm程度と極度に薄い。底部はかすかに上げ底を呈すベタ底で、釉剥ぎを行っただと思われるが、剥ぎ取りが甘いため弱い光沢を発する。



第1図 餌入れ出土地点（横内家資料平面図をトレース・加筆）



1 餌入れ磁器（左：銭蔵地区出土色絵、右：御内原北地区出土青磁）



2 環耳部分拡大（左：銭蔵地区出土色絵、右：御内原北地区出土青磁）

図版1 首里城跡出土餌入れ

環耳部分は紐状に細い外側が破損するが、胴上部に位置する最大径位に1点が貼付されている。この環耳と胴部との接点は小さいが、厚く施釉されることにより補強されている。

資料は全面が被熱を受け、そのため表面は溶解・発泡し、砂礫が付着している。釉は淡緑色に濁り、貫入はみられず透明度は低い、底面以外でほぼ均一に厚く施される。なお、この周辺から出土する青磁碗や鉢についても接合率が高く、これらは火災により焼け落ちた一括資料として捉えている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010、仲座 2011）。

③陶器製餌入れ

陶器製餌入れの出土は、中城御殿跡（沖縄県立博物館 1995、沖縄県立埋蔵文化財センター 2012）、御細工所跡（那覇市教育委員会 1991）、首里旧金城村跡（那覇市教育委員会 2001）、真珠道跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2006）の4ヶ所において出土している。これらの出土地は、現時点で首里に限られており、このことから愛玩鳥飼育の風習は、首里に暮らす土族を中心とした富裕層にたしなまれていたことが考えられる。続いて各資料の紹介を行う。

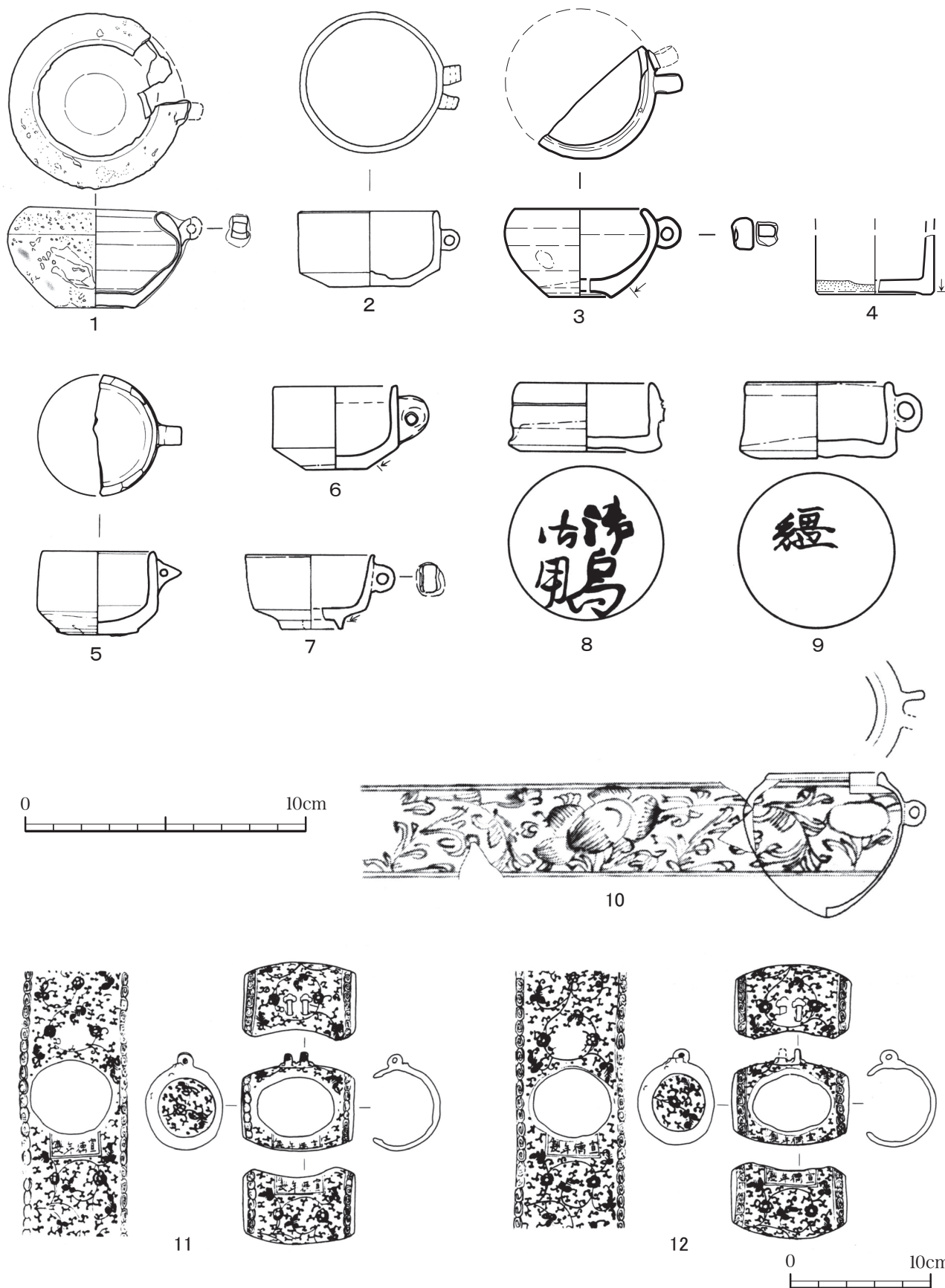
国王世子の邸宅跡であった中城御殿跡からは、沖縄産2点（攪乱層、近世の層）と関西系1点（攪乱層）の合計3点が出土している。この内、攪乱層から出土した沖縄産陶器製の法量は口径5.1 cm、底径3.0 cm、高さ2.8 cmを測る（第2図2）。形状は低い円筒形で、直立する口縁部から直に胴へ至り、腰部が「く」の字状に屈曲する。底部はベタ底で、成形は轆轤引きにより行われ、見込みには渦巻き状の轆轤痕が残る。腰部以下は無釉で、外面は茶褐色の灰釉、口唇から内面にかけては、白化粧後に透明釉をかける。環耳は胴の中央付近に、わずかに間隔をあけて2点が貼付されている。本資料は形状や環耳の点数等から、江戸遺跡等で出土している瀬戸・美濃系餌入れ（第2図8・9）に類似しており、その影響を受けた可能性がある。

次に近世の層から出土した沖縄産の資料は、内湾する小鉢形で口径4.7 cm、器高2.7 cm、底径2 cmを測る。胴上部に環耳が2点並列して貼付され、胎土は白色で胴下部まで透明釉を掛ける（第2図3）。続いて攪乱層から出土した関西系陶器の資料は、18世紀後半～19世紀製作とされる筒形餌入れの底部である。底面はやや上げ底状で底径は4.2 cmを測る。胎土は淡灰白色で細かく内外面及び底部内に淡褐色釉を掛ける（第2図4）。本資料は胴上部が欠失しているため環耳はみられないが、形状から餌入れになるものと思われる。

御細工所跡の調査では、口径4.0 cm、底径2.8 cm、器高2.9 cmの沖縄産餌入れが得られている（第2図5）。内面及び腰部まで灰白色の釉が施され、底部はベタ底で糸切り痕を残す。口縁部直下には、側面観が三角形の耳を付け、横位に小孔を穿つ。資料は攪乱層からの出土であることから、御細工所跡や周辺の遺構との関係を知ることはできないが、1700年頃の製作とされる首里古地図（嘉手納 1970）によると、御細工所跡の西側には、「東風平按司」等の土族屋敷と思われる区画がみえ、これらに関わる可能性がある。

首里旧金城村跡の資料は、口径4.4 cm、底径2.2 cm、器高3.0 cmの沖縄産で、底部近くまで透明釉を施す（第2図6）。表土直下からの出土であることから、遺構との関連は不明である。しかし、ここも首里城に近く、首里古地図によると土族の屋敷が集中するエリアにあたることから、これらの屋敷との関わりがありそうである。

真珠道跡からは、口径4.7 cm、底径2.2 cm、器高2.7 cmの沖縄産餌入れが得られている（第2図7）。器形は円筒状で、口唇はやや外傾し舌状に尖る。底部は断面が三角形の高台を有し、その脇まで透明釉が施される。環耳は1点で、胴上部に貼付される。資料は遺物を多く含むⅡ層からの出土であるが、「本層は往時の堆積と考えがたい」と報告されているため（沖縄県立埋蔵文化財センター 2006）、遺構との関連は不明である。



第2図 各地から出土した餌入れ

1：首里城跡、2～4：中城御殿跡、5：御細工所跡、6：首里旧金城村跡、7：真珠道跡、8～10：東京大学構内の遺跡、11・12：五目牛南組遺跡

3. 現代の餌入れ（中国製・ベトナムにて購入）

首里城跡において、上記した2例の中国産餌入れが出土して以降、輸入陶磁器の類例について国内外の博物館図録や陶磁器関係の書籍等で比較資料の収集を行った。その結果、中国産は元代から清代にかけて数例が確認でき（朱伯謙 1998 ほか）、ベトナム産では1例が、過去に町田市立博物館で開催された展覧会の図録中に、「青花餌入れ（東南アジア陶磁館所蔵 15～16 世紀）」として掲載されていたため（町田市立博物館 2001）、ベトナム産の餌入れが存在することはすでに確認されていた。

筆者は2001年3月に、ベトナム北部のハノイ周辺を巡り、窯跡や博物館等において、主に沖縄県内で出土するベトナム産陶磁器の比較資料調査を行った。その中で、前記した図録に収められていた餌入れを手がかりに、ベトナム産の例についても情報収集を行った。ここではその際に購入した現代の餌入れ及び使用事例を紹介し、出土品用例の参考としたい。

このベトナムにおける餌入れの比較資料調査の対象として、まずは博物館・美術館の展示品及び、古物商において伝世される例を求めた。しかし、そこで確認できたのは、碗、皿、壺類が中心で、小物だと合子や小壺・水滴類があり、餌入れは見あたらなかった。次に、現在のベトナムで生産している餌入れを求めた。しかし、調査の合間に訪れた数軒の市場において確認できた焼物は、一般の食卓に並ぶ碗、皿、杯、鍋等の器種に限られ（図版2-1）、ついにベトナム産の餌入れと思われる資料を確認することはできなかった。この理由はとして、トリを飼育する人たちが、ごく一部の市民に限られるという需要の低さから、現在は生産していないことが考えられ、この仮定に立つと、前記した15世紀頃のベトナム産餌入れは自国で消費するものでなく、輸出用に生産されたものと捉えることができる。

このような中で、次に案内されたハノイ市内の小鳥専門店において、ようやく磁器製の餌入れを確認することができた。そこでは数種類の形状、サイズ、文様の餌入れ4～5点が1セットとして、60,000 ドン（約350 円 / 2001 年3月時のレート）前後で販売されている（図版2～4）。これらの商品には、製造国を示す刻印やシール等の表記がみられないことから、当初は生産地の特定が困難と思われた。しかし、その包装紙として使用されていた新聞紙に、中国語の表記が確認できること及び、製品の文様・製作技法等から、中国産と考えることができそうである。このように、安価な中国産が流通している状況からも、ベトナムではすでに生産されていない可能性が高い。

図版3-2の資料は、色絵磁器製の尖底餌入れである。全体に薄造りで軽量化が図られており、胴の最大径位には、横位に胴接ぎによる境界が見られるため、型打ち成形後に接合したものと思われる。口唇以外に



1 市場で販売される陶磁器類



2 ハノイ近郊の小鳥専門店

図版2 市場での陶磁器販売風景・小鳥専門店（ベトナム ハノイにて）



1 現代の餌入れ（中国産・下段中央は平底でそれ以外は尖底）



2 尖底餌入れ竹製器具装着時



3 器具分離後に現れた環耳



4 平底餌入れ竹製器具装着時



3 器具分離後の状況

図版3 現代の餌入れ（中国製 ベトナムにて購入）

透明釉を施し、胴部には上絵付けにより、朱・黄・緑色の釉薬を用いた鳳凰が型紙によりプリントされる。この胴部には、鳥籠の格子に固定するための側面に縦溝が彫られた立方体の竹製器具（有溝竹製器具）が付き、使用時には籠の内壁格子に宙吊り状態で固定する。

この竹製器具は、上面は器壁側が狭い扇形で、側面・前面は長方形を呈する。器壁に接する面は、曲面に合わせて密着するようラウンドして削られ、その境界には、接着に用いた透明のボンドがみられる。このことから、当初はこのボンドのみで固定されているものと思われた。しかし、器具の側面に打ち込まれている竹釘が確認できたことから、これを抜いて分解したところ、器具の内部は中空で、その内側には餌入れ本体に付着する環耳が1点収まることが判明した（図版3-3）。竹釘は竹製器具と餌入れ本体を固定するため、器具側面から環耳を貫通させて打ち込まれている。この環耳の形状は、断面方形の円筒状で、歪みがなく均整を保つことから型押しによる成形と思われる、竹製器具を固定させる目的がある。

これらの特徴から、本資料の製造は上下及び環耳を個別に成形したのちに胴接ぎを行い、環耳を接合して施釉後、覆焼きにより焼成されたことが判る。なお、本資料は第2図10で示した東京大学構内の遺跡で出土した染付餌入れ（東京大学埋蔵文化財調査室 1990b）と形状が類似している点で興味深い。

続いて図版3-4の資料は、染付磁器製餌入れである。内湾する碁笥底の鉢形で、本資料も胴の最大径位に胴接ぎ痕が確認できることから、上下を個別に型打ち成形して接合している。内底は浅くくぼみ、畳付けは無釉である。文様は線描きのラフなコバルトの草花文が、器壁全面及び内底面に印判で施文される。本資料も胴部に立方体の有溝竹製器具が、前記した尖底の資料同様に竹釘とボンドで接着されており、これを分解すると、環耳が1点付着する状況が確認できた（図版4-5）。本資料の器形は、平成19年度出土青磁餌入れと類似しており、定型化された餌入れの一群を成す可能性がある。

以上、2点の参考資料を紹介したが、これらは先に紹介した出土品との共通項が多く、その形状・用例は現代まで伝統的に受け継がれている可能性が指摘できそうである。

4. 用例について

これまで、出土品と参考資料として現代の餌入れ磁器の特徴を挙げてきたが、ここでは出土品の用例について、現在のベトナムで行われているケースを参考に類推してみたい。

ベトナムの小鳥専門店及び、ハノイの南側に位置するバッチャン村における小鳥飼育状況からは、尖底、丸底、平底、楕円丸底の4種の小鳥餌入れが確認できた。これらの餌入れは中国製と思われる、色絵が主体となるが、染付も存在する（図版3）。

餌入れのサイズは、大きく大・中・小に分けられ、直径は3～5cm、高さは尖底で3～6cm、平底で2cm～と小振りであることと、器厚は2mm前後で全体的に薄いため、重量は約10～50gと軽い。その側面には、例外なく竹製器具が環耳を通して竹釘で固定されている。

この使用事例であるが、鳥籠内壁の格子間に、竹製器具の縦溝があたるように挟み込み、宙吊り状態で固定している（図版4-2）。飼育される小鳥に与えられる餌は、雑穀のようなものと思われるが、重量が軽いため宙吊りの餌入れに満載しても、過重により落ちたりすることはない。

また、鳥籠の底面には、飲用及び水浴び用として、プラスチック製容器や、食器の鉢類を代用している例がみられた。この例から、薄く軽い製品は宙吊りで使用し、大型かつ重い製品、あるいは水を入れるなどして重くなった容器は、床面に設置する状況が見える。この傾向から、出土餌入れの用例について類推してみたい。

出土資料紹介の項であげた餌入れは、中国産2点及び沖縄産5点、関西系1点で、すべて平底の餌入れである。これらの最大径は、磁器製で約6cm、陶器製は4～5.1cmと現代の餌入れに比して大振りであり、器

壁についても厚手のため、軽量化が考慮されているとは言い難い。また環耳について言えば、出土磁器製のものは細く繊細であることから、宙吊りの使用には耐え難いと思われる。これに対し、出土陶器製の環耳は磁器製より強固な造りを成すが、平底である点と器高が低い点で、宙吊りの場合、水平を保った状態で器を固定するには安定性に欠ける。これらの点から、先に紹介した出土品に関しては、籠の床面に接地しつつ、何らかの方法で格子に固定していたことが考えられる。

しかし、これらの平底の餌入れを、籠の床面に接地した状態で環耳を格子に結束したとしても、移動に際して籠が傾斜、あるいは上下に揺れることが予測できる。この場合、餌入れは環耳部分を軸として、横方向に旋回するか、上下にバウンドすることが推測でき、それが原因となり餌入れや鳥籠が破損し、飼鳥にも危険が及ぶ可能性がある。この状況を改善するためには、餌入れが動くことがないように固定する工夫が必要となってくる。

そこで考えられるのが、現代餌入れに見られる有溝竹製器具の存在である。この器具については、現時点で史料等にみえないことから、その発生等については不明である。しかし、前記した状況を回避するためには、この器具の装着が最も有効と考えられ、移動が前提となる鳥籠内に確実に固定するためには不可欠な器具と言える。また、加工が容易な竹を用いている点でも、環耳や格子のサイズに合わせて製作しやすいという利点があり、その簡易性から出土品にも装着されていたことを想定することができるが、現状ではその痕跡が確認できず、特定は困難である。

ここで用例についてまとめると、今回紹介した現代の餌入れは、全てが小型・軽量で竹製器具が装着されることから、籠内では宙吊りで使用することが前提となっている。これに対し、出土品の例は全て平底で大振りの資料が多い上に重く、宙吊りによる使用には適していない。従って、平底の出土品は餌水兼用として、籠の床面に設置していたことが考えられそうである。

5. 動物愛玩の記録・痕跡

この沖縄において、愛玩鳥飼育がいつ頃から始められたのか定かでない。しかし、王府時代の記録には、愛玩・観賞用、ときには贈答用と思われるトリの名がしばしば現れる。例えば、王府時代の外交文書である『歴代宝案』によると、尚徳王は1470年に朝鮮へオウムやキウカンチョウを贈り、その返礼として方冊蔵経を得ている（沖縄県歴代宝案編集委員会編 1997）。これらの鳥類は、沖縄固有の在来種ではないことから、その生息地のひとつである東南アジアから、何らかの形で移入されたものと思われる。なお、この歴代宝案



1 ショーケース内に餌入れが並ぶ



2 餌入れの用例（ハノイにて）

図版4 餌入れの用例（ベトナム ハノイにて）

には 1425 年から数回にわたり、シャム、マラッカ、スマトラ、ジャワ等の東南アジア諸国と交易に関する文書を交わしていたことが見える。これらの文書に記載されている交易品目録には、陶磁器や香木、織物等の名称はみえるものの、贈答に用いた鳥類の名を確認することはできない。しかし、運ばれたトリたちは多くの舶載品のひとつとして、これらの交易地から入手したことが考えられ、その運搬や飼育に際し鳥籠と餌入れは必須である。

次に、近世首里王府の公文書である『評定所文書』には、那覇に逗留する中国やイギリス人が、王府あてにメジロを飼育したいとする要望を記したくだりがあり、その中にメジロの方言名である「さうみな」、「さうめなあ」の名称がみえる。また、そこには鳥籠の製作を請け負う「細工人」の存在も確認でき、鳥籠は受注生産品であった可能性が考えられる（琉球王国評定所文書編集委員会 1989・1998、久場 2006）。

なお、ここに出てくるメジロについては、東アジア、東南アジアに広く分布するが、沖縄県内においても山地から平野にかけて生息しており、地域亜種のリュウキュウメジロとして、今日でも愛玩用として飼育される馴染み深いトリである。この記事から、飼育される鳥類は移入されたもののほか、在来の野鳥も対象にしていたことが想定できる。

これらの記録には、今回主題とした餌入れの記載は見あたらないが、当時の愛玩鳥飼育が王族や士族に限られる習俗であれば鳥籠と同様に、その付属品である餌入れに関しても、雑器的な量産品ではなく、受注生産品としての性格が考えられる。そこから、当時の王族や士族がたしなむ趣味の一端をうかがい知ることができるとともに、そこに贅を尽くすという優雅な一面を感じさせる。

なお、県内で出土品として確認できる愛玩動物と思われる動物骨として、現在でもポピュラーなイヌについては縄文時代早期から（沖縄県教育委員会 1987）、ネコについては古く時代から（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 ほか）、これまで多くの事例が報告されている。この内、イヌの骨には解体時のものと思われるカットマークが残る資料がみられ、狩猟用・愛玩用のほか、一部は食用に供された可能性がある（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 ほか）。

その他、勝連城跡三の郭北側城壁より、大型のオウムとされる右中足骨が 1 点出土しているほか（勝連町教育委員会 1990）、特に珍しい事例としては、今帰仁城跡よりトラの下顎骨片が一对得られている。しかし、ここでは下顎以外のトラの骨が一切見あたらないことから、他の部位は当初からなかった可能性があると考え（今帰仁村教育委員会 1991）、この場合、トラの下顎部あるいは頭部のみが、装飾品・威信財または珍品目的で輸入された可能性がある。

次に、首里城跡管理用道路地区の調査において、サルの骨が 2 個体分出土しており、その時期は伴出する陶磁器類から、16～17 世紀に属する可能性があると考えられる（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001）。これらはミトコンドリア DNA 変異を用いた遺伝子レベルでの比較分析により、ヤクシマザルとの同定がされ（毛利ほか 2001）、さらに、焼かれた痕跡やカットマークが見られないことから食用でないことと、歯の萌出時期と咬耗度から、野生ザルより飼育ザルに近いという（毛利 2001）。これらのことから、このサルは愛玩を目的に移入された可能性が考えられる。この骨が出土した地点は、南側外郭の外（南）側斜面であり、遺物を含む堆積土は、その北側台地上の内郭に広がる御内原からの投棄、あるいはそこから流出したものと考えられている。このことから、出土したサルは御内原で飼育されていた可能性があり、これらの出土骨や餌入れの存在から、城内では数種の愛玩動物が飼育されていたことが判る。

6. おわりに

以上、首里城跡及びその周辺から出土した餌入れを中心に、資料紹介とその用例、愛玩動物の記録・痕跡について論じてみた。最後に若干の考察を加え、まとめとしたい。

この餌入れは出土数が希少であることから、その変遷を読むには困難な面もあるが、本稿であげた県内外の出土品から、大きく次の4種に分けることができる。①平底鉢形（中国産青磁・色絵）、②尖底鉢形（中国産染付）、③太鼓形（中国産染付）、④平底筒形（瀬戸・美濃系を含む関西、沖縄産）である。

この中で①平底鉢形のタイプは、出土品及び参考に用いた現代餌入れの例から、15世紀頃～現代まで継続して製作されていることが考えられる。次に②尖底鉢形のタイプは、環耳のないベトナム産染付の例が15世紀頃には存在し（町田市立博物館 2001）、その他江戸遺跡から出土した1820年～幕末とされる中国産染付（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）及び、この類品が現在も製作・販売される事例から、15世紀頃から現代まで平底タイプと並行して存在していた可能性がある。また、その用例についても前記した類推から、平底タイプの床面設置と尖底タイプの宙吊りとが併存していたことが考えられ、その中で移動が前提となる鳥籠内に固定する必要性から、環耳が考案されたことが想定できる。

続いて、群馬県で出土している③太鼓形の例は、現時点で18世紀の例が知られるのみであり（大橋康二 1992）、餌入れの中では18世紀以降に流通した形状と考えられる。④筒形平底は、江戸遺跡で出土する瀬戸・美濃系陶器と、沖縄産の例がある。前者の瀬戸・美濃系は、18世紀中葉頃に出現して19世紀になると増加する傾向にあるとされ（東京大学埋蔵文化財調査室 1990、成瀬晃司 1996）、後者もほぼ同時期かこれに後続する時期の製作と考えられる。この沖縄産陶器製の形状は、瀬戸・美濃系の形状と近似しており、製作にあたり影響を受けたことが考えられる。

この中で①～③に該当する輸入陶磁製については、全国的に見ても出土例は希である。その理由として特に①②の資料に関して言えば、中世の段階ではトリの飼育が一部の権力者等に限られたことによると思われ、トリは交易による舶載品の一部として持ち込まれ飼育された可能性がある。この際、餌入れは個別に発注するのでなく、トリを持ち込む際の付属品として同時に移入されたことが考えられ、そのため出土量が多くないことが考えられる。

その一方で、日本国内では江戸時代中期に大名・旗本はもとより、庶民の間にもトリの飼育が流行したとされる（細川 2006）。これに伴い、陶器製餌入れが近世の瀬戸・美濃を中心とする地方の窯業地で焼造され、江戸にもたらされている。そのため、江戸遺跡からは一定量が出土しており、この状況から、ある程度量産が行われていたことが推察できる。これに対し、その影響を受けて製作されたと考えられる沖縄産の例は、出土例は少ないが施釉の状況等から壺屋で焼成されたものと考えられ、出土量から注文により少量が製作されたものと思われる。

なお、かつての琉球が周辺諸国と交易を繰り返し、多くの文物が行き来していたことは、出土品や各種の記録から明らかである。これらの物資とともに、煙草や茶・酒等の嗜好品及び、象棋をはじめとする娯楽の文化が伝わり、その一環としてトリをはじめとする動物を愛でる習俗がもたらされた可能性は十分に考えられる。

しかし、発掘調査において確認されるその痕跡といえば、今回紹介した陶磁器製の餌入れや、トリの遺存体であろうか。ちなみに、これまで首里城跡から出土しているトリの骨は、その大半をニワトリが占めており、その他カモ類、キジ類、サギ類、カモメ類、キジバト、カラス、ワシ等が見られ（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 ほか）、食用と思われるものと野鳥が混在している形である。しかしその多くは、骨の残存状況や標本の不足から種の特定が困難で、それらは分類の段階で「トリ」として留めざるを得ない状況にある。これらの不明鳥類には飼鳥が含まれている可能性もあり、今後は交易により移入されたことも想定し、近隣諸国をも含めた広範に及ぶ比較標本の強化等、種の特定に向けた対策も必要となろう。

（なかざ ひさよし：調査班 主任専門員）

〈参考・引用文献〉

- 大橋康二 1992「Ⅲ 近世・近代 五目牛南組遺跡出土の鳥餌入について」『群馬県佐波郡赤堀町五目牛南組遺跡発掘調査報告書歴史時代編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 沖縄県教育委員会 1987『古我知原貝塚－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』
- 沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿跡－旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『真珠道跡 首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書Ⅰ－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）』
- 沖縄県歴代宝案編集委員会編 1997『歴代宝案』訳注本第2冊（第1集 巻42・1－41－17、巻40・1－40－01ほか）
（財）沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室
- 勝連町教育委員会 1990『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』
- 嘉手納宗徳 1970『首里古地図』沖縄風土記刊行会
- 久場政彦 2006「沖縄の伝統鳥籠について」『沖縄県立博物館紀要第32号』沖縄県立博物館
- 朱伯謙 主編 1998『龍泉窯青瓷』藝術家出版社
- 新沖縄県史編集専門部会（考古）編 2003『沖縄県史 各論編第2巻 考古』沖縄県教育委員会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990a『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点 医学部附属病院中央診療室・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990b『東京大学構内の遺跡 山下会館・御殿下記念館地点』
- 仲座久宜 2010「首里城跡発掘調査（銭蔵跡）」『発掘調査速報展 2009 文化講座レジュメ』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜 2011「首里城内における3時期の廃絶を示す貿易陶磁器－平成19年度の調査成果から－」『貿易陶磁研究第31号』日本貿易陶磁研究会
- 今帰仁村教育委員会 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 那覇市教育委員会 1991『御細工所跡－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』
- 那覇市教育委員会 2001『首里金城村跡－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査－』
- 成瀬晃司 1996「第一部 記載の世界」『歴史の文字 記載・活字・活版』東京大学総合研究博物館
- 細川博昭 2006『大江戸飼い鳥草紙－江戸のペットブーム－』吉川弘文館
- 町田市立博物館 2001『ベトナム青花－大越の至上の花』
- 毛利俊雄 2001「首里城跡管理用道路地区出土の獣類遺体について」『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 毛利俊雄、吾妻健、石神盛敏、川本芳 2001「ミトコンドリア DNA 変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク古骨と現世種の比較」『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1989『評定所文書』第3巻 浦添市教育委員会
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1998『評定所文書』第14巻 浦添市教育委員会